

平和紙芝居をどうしても創りたかった私は、二〇〇五年、紙芝居『二度と』を創った。広島・長崎被爆六十一年の年に、「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ」の声を、共感の世界に刻みつけた。

そして今年六月、私は沖縄にいた。あの普天間基地のある、宜野湾市の志真志小学校の子どもたちが、私を待っていてくれた。

この学校の真上は、米軍機の飛行ルートにされている。その日、気温が三十度をこえる体育館で、あけはなれた窓からは轟音が入ってきた。

志真志小学校では毎年、沖縄「慰霊の日」である六月二十三日を中心に、平和を学ぶ時間を持っている。この日も授業時間の午前一時半を四年生、午後一時半を五、六年生にとっていた。

体育館に入ると、少し緊張して床にすわっている子どもたち。正面に手書きの青い文字「平和集会・平和な未来を考えるー戦争がひきおこしたことを見つめて」の幕。そして「命と宝」の文字と、切り絵の羽ばたく鳥、沖縄の花もかざらされている。先生たちの思いがこもる美しい空間に、『二度と』が入った紙芝居の舞台は置かれていた。

紙芝居を演じる前に、私は、なぜ『二度と』を創ったのかを、伝えたかった。そして戦争と平和について、子ども自身に考えてもらうことから、始めようと思った。まず私が白板の左側に黒いペンで大きく、とげとげた形を描く。その中央に「戦争」と文字を入れた。



# 平和への願い

「戦争と聞いた時、心に浮かんだことを言ってみて。合ってるまちがってるは、関係ない。言ってくれたら、戦争の字の周りに書くよ」と言うと、子どもたちは一生懸命考えて、言ってくれた。

「人殺し、原爆、基地、自決、悲しい、人の心をうばう、家族がいなくなる、戦争に行きたくないのに行かされる…」と。

次は、白板の中央に青で円を描き、「平和」と字を入れ、心に浮かんだことを言ってもらった。

「人々が幸せ、家族といられる、友たちがいる、心を大切に、人種差別がない、自然が豊か、楽しい、自由…」と、語る子どもの顔は輝いていた。

戦争と平和の文字の周りに、みんなの言葉がぎっしりと入ったところで、私は戦争と平和の間を真二つに分けるように、縦一本の線を引く。それは一九四五年、敗戦の年をあらわす。さらに時間の流れをあらわす線を横に引いて話した。一九三二年に日本が侵略戦争を起し、十五年間に、日本は二千万人を越えるアジアと世界の人々の命をうばったこと、日本人も三百万人以上が死んでいったことを。

子どもたちは日本が戦争を起したことを聞いたとたん、大きく目をひらき、身体中で集中した。子どもは、真正面から真実を受けとる力があるのだと、私の心は熱くなる。

それから私は、敗戦後の日本が、平和憲法を持ち、平和への道を歩みはじめたことを話し、みんなの生まれた年を聞いた。子どもたちも先生も、そして私自身も、みな一九四五年より後の生まれだ。平和の中を生きてきた。

「でも、私のお母さんは違つ」と私。

「お母さんは一九三四年に生まれてから、十一歳まで、ずっと戦争の中だった」子どもたちは今の自分と、十一歳の母をかさね、息を止める。

母の父は、戦争の時、経済学者として「この戦争はまちがっている」と反対した。そのため牢獄に入れられ、若くして死んだ。母は、私が小学六年生の時に、戦争のことをぎっしりとノート十枚に書いてくれた。そこには戦争の暗黒を生きた叫びが刻まれていた。

四十年間、大切にしてきたこのノートの最終ページの言葉を、私は子どもたちに聞いてほしかったのだ。

私は読む。最終ページの母の言葉を。

「どんなことがあっても戦争をしてはいけません。平和を守りぬくのです。皆が力を合わせれば、それはできるのです。そのためには『本当のことをみぬぐ力』と『戦争をおこさないために口先だけでなく行動する』ことが必要なのです。

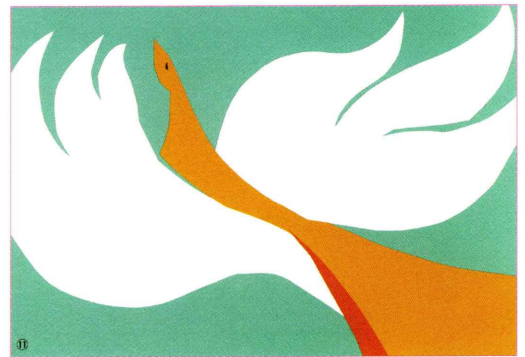
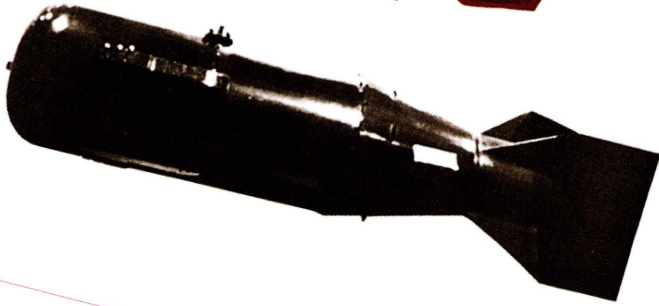
エイちゃんは、これから、いろいろなことがわかる大切な時期です。『本当のことを、しっかりみぬぐ力』をもち、自分だけの小さなしあわせでなく、みんなの平和としあわせのために行動する』人間に成長して行ってください。私はあなたに、それをのぞみます。

だから私は、平和紙芝居を創った。だから、みんなに見てほしい。

そして、『二度と』を演じた。

原爆で殺された人びと、苦しみを人びとの無念の悲しみと怒りをこめて、

# 二度と



まつい 松井エイコ

壁画家／紙芝居作家

— 沖縄の子どもたちと共に —

# 「心ひびきあう

画面を抜きだしていった。子どもたちはまっすぐな眼で、「戦争が引きおこしたこと」を見つめる。

暗黒から立ちあがり、「生きる」と叫ぶ八歳のアヤ子の姿、ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキの声の中で、私の描いた鳥が飛びたつ時、紙芝居の共感の中で、子どもたちの心がひらいていく。

「平和をつくる」とする人がめざす理想」が心深くひびいていることを、私は全身で、感じとっていった。

演じ終えた静けさの中で、私は語った。「世界中から戦争のない未来は、必ず、つくれる。私一人の力は小さい。でも、みんなの力を合わせれば、必ずつくれる。一緒に、平和な未来をつくらせてほしい」

その時、私を見てくれた子どもたちの姿を、私は一生忘れないだろう。それは、一人の人間として前を見つめる、凜とした姿だった。

子どもたちは「平和の鐘」という歌を合唱して、私を送りだしてくれた。その優しく強い意志のこめられた歌声の中で、私は涙がとまらなかった。

『二度と』は二〇〇六年に「ミュンヘン国際青少年図書館」が企画する、平和を伝えるための国際図書館展に、紙芝居では初めて選ばれ、今、世界の国々に自国の言葉に翻訳され、演じられている。日本各地でも様々な場で演じられている。三〜四歳の子どもでも真剣に見てくれるとこ。

紙芝居の持つ、すばらしい力を信じて、私も共に、平和の文化を子どもたちに、手渡しつつ歩いていきたい。